

# *Bookish*

*Layback*

## チェンジ

---

また入れ替わってる。さっきの授業までは篤だったのにいま窓際の席に座っているのは翔だ。双子の鞆野兄弟はふざけて時々クラスを入れ替わる。そして終業のチャイムが鳴った途端、手を叩いて悪戯の成就を喜ぶのだ。ほんとにこどもなんだから。篤より涼やかな横顔に、今日もわたしだけが気づいてる。

## お客様

---

「お客様の中にお医者様はいらっしゃいませんか」手を上げた医師が倒れた男を診る。そして首を横に振る。「なんとかして下さい」CAは医師にすがりつく。「私は神ではありません」CAは振り返り再び声を張り上げる。「お客様の中に神様はいらっしゃいませんか」客が皆手を上げた。

## エイプリルフール

---

「ママは学生時代すごくモテたから男の子たちに言い寄られて大変だったのよ。だからね、エイプリルフールにみんなを集めて言ったの。いちばん素敵な嘘をついた人と私、結婚するわって。ね。あなた」「ああ」「パパ、ママになんて言ったの?」「君は自分が思ってるほど美人じゃない」

## 世界

---

錆びた鉄の匂い。俺は滑り台に寝転んでいる。大人の体には少々窮屈で、棺桶に入れられているような気がしないでもない。だが星空の天井はどこまでも広がっている。今日から俺の部屋は世界。壁もドアもない。腹は空いていても、満たされた、いや、赦された気分で俺は、眠りに落ちる。

## 目刺し

---

人を保存するには干すのが一番。あーだめだめ、そこは硬いから。目を刺すんだよ。そう。後頭部に向けてね。少年は鉄の棒を男の右目に突き刺す。まだ生きていたのか男の体は急にぶるぶると震え出す。ゼリー状の眼球が地面に零れ落ちる。丘の上では完成した目刺しが春風に揺れている。

## 村

---

小説家の村というのがあつた。平和そうに思えるだろ？ ところがどつこい。彼らはとにかく嫉妬深い。あいつの小説はくだらない。あいつの小説なんて小説ですらない。云々。嫉妬と憎悪と自惚れがマーブル模様雲になつて空を覆つてゐるからすぐにわかるよ。グーグルアースで見てください。

一本。二本。三本。大根に跨った若者たちが深夜の峠を駆け抜ける。まるでロケットだ。彼らはコーナーを曲がる度に大根を激しく路面に擦りつけてゆく。これをドリフト走法と呼ぶのだそうだ。ガードレールの側ではお婆さんたちが器を抱え、大根おろしをキャッチしようと身構えている。



## トラブル

---

夫が帰ってきた。まだ16時過ぎだというのに。いつもなら早くても19時頃なのだから明らかに早過ぎる。「どうしたの？ 体の調子でも悪いの？」顔面蒼白。返事もない。夫はスーツの上着だけ脱ぐとやにわに味噌汁を作り始めた。傍らには洗面器と氷。会社で一体何があったのだろう。

## 万引き

---

店長、万引きです。レジに入っている葵からインカムで報告が届く。またか。何回目だ。防犯カメラのモニタを確認する。足早に出口に向かうイケメン風の男。俺は事務所を飛び出した。「こらっ」逃げる男を俺は片足タックルで仕留める。転んだ拍子に男の上着のポケットから葵の心がこぼれ落ちた。

## 裂傷

---

前から見ても判らない。ただ横から見ると身体の側面の皮下脂肪が丸見えになっていて血と体液が滲んでいた。「で、なにがあった?」「タンスの角に足の小指をぶつけた途端に裂けたんだ。スライスチーズを裂くときのように一気にね」弟は右手に裂けた足の小指と皮膚をぶら下げている。

## お仕事

---

「やぁ目が覚めたかい」「ここはどこ？」「君はね。死んだんだ。交通事故でね」「パパとママは？」「ご両親共死んでしまった。君だけは身体の損傷が少なかったのでサイボーグとして蘇ってもらったんだ。分かったかな？ では早速お仕事だ。さぁおいで。おじさんと一緒に寝るんだよ」

## 首

---

『山本くん』課長の声が躰に響く。『きみ、首はどうしたんだね』私はキーボードで入力する。「置いてきました」『そんなことで仕事になるのかね』「だいじょうぶです。ルーティンワークですから」『きみの首は今なにをしているんだ』「居間でテレビを見ています。ねこといっしょに」

## 雛祭り

---

久々に見るあの子はやっぱり可愛い。「どこ見てるの？」うるさい。僕は雛飾りの二段目から目が離せない。「この子が気になるの？」ゆりは僕を抱き上げてあの子に近づける。ち、ちか  
いよ、僕は恥ずかしくて顔を背ける。「やぁねえ。猫のくせに照れちゃって」うるさいうるさい  
うるさい

## 書齋

---

頁を捲りながら物語世界に浸る。こつこつと作り上げた書齋の蔵書は約五百冊。けして多くはないが目の前にお気に入りの書物が並んでいるというだけでとてもいい気分になる。ただ頻りに邪魔が入るのが難点だ。「お父さん！ 早く出てよ！」私は本を書棚に戻し、いそいそと水を流した。

男は鞆からマイ吊革を取り出した。隣に立つ私の視線が気になったのだろう。男は微笑む。「私は潔癖症でしてね。人ともものを共用するということができないのです」男は鞆の中身を見せてくれる。「マイカップにマイ箸、マイスリッパ」そして美しい女性の写真。「これはマイワイフです」



## dis

---

「店長、早く新しいバイト雇ってくださいよ」「昨日一人面接に来たよ」「人間っすか?」「いや」途端に悠一はふてくされる。「なんだ。不満なのか」「ゾンビは暗い奴が多いから」「だが、みなまじめに働くぞ」「別に店長のことdisってる訳じゃないっすよ」人間は扱いづらい。

## 自由形

---

「次は自由形だ」プールに蹴り落とされる。一瞬溺れそうになるが持ち直した俺は平泳ぎで戻る。「自由形だと言っただろう？」コーチの顔が歪む。「平泳ぎは――」「そんなものは自由じゃない」顔面を蹴り飛ばされる。今度はクロールで戻る。「それが自由なのか？」再び蹴り落とされる。

## 本物

---

目当てのコインロッカーを見つけた。もう一度左右を確認する。旅行者風の外国人が数人。だが私のことを気にするものはだれもない。鍵を差し込み左に回す。中には茶色の紙包み。公衆トイレの個室で私はそれを開ける。思わずため息が漏れる。生まれて初めて目にする。これが「本」なのか。

## 春雪

---

雪が舞っている。3月だというのに。予報も見ずにスプリングコートを羽織り颯爽と家を出たはいいが、なにあの人寒そう、てな目で女子高生にガン見される始末。なんなんだこの仕打は。君たちの丈短スカートよりマシだよ、と睨み返すも鼻で哂われる。やれやれ。露出狂には冬の時  
代だ。

## GAMEOVER

---

悲しげなメロディ。智の背中越しにGAMEOVERの文字が見える。「時々思うんだよな。実はおれもゲーム内のキャラで、どこかのだれかに操縦されてるだけなんじゃないかって。何をやってもうまくいかないのはおれが悪いんじゃないかって、ただそいつがゲーム下手なだけなんじゃないかって」

## 男

---

「男はそもそも馬鹿だから生きる価値がないの。だから今では男の子が生まれると性器だけ切り取ってすぐに殺すのね。で、切り取った性器は野に放ちます。厳しい生存競争に勝ち残った性器がこれよ」先生は先割れミミズを水槽から取り出した。「では今からセックスのお手本を見せます」

## 地下街

---

梅田地下街に閉じ込められることになろうとは夢にも思わなかった。聞くところによると地上の建物のほぼ全てが倒壊しているそうだ。「そうだ」というのはまだ実際には見ていないからだ。出入口は崩落していて使えない。俺のいる泉の広場には水を求める人々が続々と集まってきた。

## 時間

---

時よ止まれ。皿を落とした瞬間念じたのがきっかけだった。止まりはしなかったがそれ以来時間の進みが遅くなった。全てがスローに見える。おかげで野球選手にもなれたしボクシングでは6階級を制覇してしまった。もう金も女も何もいない。俺は久しぶりに鏡を見る。この老人は誰だ？



## 胡桃

---

割れる。割れない。道端で拾った胡桃が割れない。割れる。ぎゅうと握り締めても割れない。ひとけのない踏切でぼくは胡桃をそっとレールに載せる。カンカンカンと遮断機が下り、見る見る見る間に列車は迫る。車輪が胡桃を踏んだ途端、キーンと耳鳴り。機関車は真っ二つに割れてゆく。

# 命

---

被災地への電力供給を途切れさせない為にも皆で節電しよう。誰ともなくつぶやかれた声が広まる。ぽつり、またぽつりと街からあかりが消えてゆく。やがてやさしい闇が街を包む。子どもが寝静まった頃、街はしずかに揺れはじめる。数多の命がうしなわれた日。また新たな命が生まれた。

## 死にたい男

---

「死にたい男」は突然、小説を投稿し始めた。どうせ救いのない結末になるのだろう。誰もがそう思いながら眺めていた。ところが数分おきに更新される小説の欠片は希望を手繰り寄せるように前へ前へと進んでゆく。夜が明ける頃、ついに男の小説は結末を迎える。ハッピーエンドだった。

## ヘルメット

---

「ヤス、ヘルメット取ってこい」「はい！」飛んでいったヤスはすぐに戻ってくる。「アニキ！ヘルメットはありません！」「なんだ、そんなものも用意してねえのか。じゃあ鍋を持ってこい。ありったけだ」「アニキ、極道が鍋をかぶって逃げるんですかい？」「馬鹿野郎。炊き出しだ」

気が付くと「死にたい男」は瓦礫に埋まっていた。幸い右手には携帯が握られている。「クソが。まだ生きてるよ」男は呟いた。「良かった」「安心しました」リプライが殺到する。普段「死にたい」としか呟かない男にだ。「クソが」ふっと瓦礫の重みが抜ける。明かりが差し込んでくる。

## くまさん

---

くまさんが目をさますとあやちゃんの姿がベッドにありません。部屋の中に物は散乱し、窓のガラスは割れています。地震でもあったのだろうか？ くまさんはあやちゃんのことを気になります。僕がいないと寝られない子なのに。くまさんは割れた窓をくぐり抜けます。必ず見つけるからね。

## 少年

---

少年は避難所の床で寝てしまった妹に自分の毛布を掛けてあげている。被災して以来、彼は言葉と表情を失っていた。「つらい時や悲しい時は泣いてもいいんだよ」少年は目に光を湛えたまま口を真一文字に結んでいる。自分もそうだったなと私は30年前を思い出す。2011年の3月を。

## 笑顔

---

「結局まだ生きてる。明日退院だ」死にたい男はベッドの上で呟く。もちろんナースには隠れてだ。ろくでもない人生の中で「皮肉」や「批判」などろくでもないスキルばかりを身に付けてきた男に返信が殺到する。「まだ生きてたのかw」「死ねw」思わず頬が緩む。「クソが」男は「笑顔」を覚えた。



「なんだまた泣いているのかい？」泣き虫の僕は呆れ顔のパパに言い返します。「じゃパパは泣いたことがないの？」パパは笑います。「そんなわけないじゃないか。パパだって人間だ。子供の頃はよく泣いていたよ。大人になってからは一度だけだけどね」「いつ？」「君が生まれた時さ」

## 犬

---

犬は夜の平原を彷徨う。助けを求める手が瓦礫のあちこちから突き出されているが犬は見向きもしない。触れるまでもない。しな垂れた指先はとうに冷え切っている。食料も水もいまはどうでもいい。犬はただ頭を撫でてくれる飼い主の手のひらの温もりを求めて夜の平原を彷徨い続ける。

## 揺れ

---

「痩せたかい？」私は妻に訊ねる。いつもより細身に見えたのだ。余震が続く中、精神的に参っている妻は何も口にしようとしなない。「だからちゃんと食べなきゃだめだと言っただろう」「違うの」妻は冷蔵庫からボウルを取り出す。中には乳白色の液体。「揺れで液状化したの。わたしのおっぱい」

## 炊き出し

---

「ヤス。この鍋じゃ炊き出しには小さすぎる。大鍋を二つほど買ってこい。あとは材料だな。米は事務所にあるだろ。じゃ肉と野菜、それにカレーパウダーだ。馬鹿みたいに全部買い占めるんじゃないぞ」兄貴はベンツのキーを放り投げる。「分かりました」「あとなヤス、パウダーは甘口にしろ」

## 桜の季節

---

桜の花びらが風に舞っている。校庭の隅に広げたござの上で写真を手に持つ母親とおにぎりを頬張る小さな兄妹。おいしいね。おいしいね。母親はそれを見て微笑む。写真の中の父親も微笑んでいる。ねえママも食べようよ。おいしいよ。おいしいよ。促されて母親もおにぎりを頬張る。「おいしいね」

## ゴリアテ

---

巨人ゴリアテが燃えさかる東の大地に呼ばれた。猛る炎がゴリアテの巨体を真っ赤に照らし出す。ゴリアテが手を上げて合図をすると遠巻きに見ていた民衆たちはみな目を瞑り静かに両手を合わせた。巨人の股間から放たれた黄色い水がアーチを描く。炎は見る見る間に勢いを失っていった。

## 停電

---

停電に乗じて久しぶりに妻と肌を重ねた。なかなかいいセックスだった。TVを点けると昼間見た光景が再び映し出される。「あれは何？ 潜水艦？」「鯨だよ。潮を吹いて火を消し止めようとしてくれているんだろ」「あたしも行こうかしら」妻は濡れたシーツをベッドから剥がし始めた。

## 支援

---

晶は余震で生じた火の手を攻撃魔法で吹き飛ばしている。回復魔法を使える俺と巨は特設テントで怪我人の治療に当たっていた。ところで猛は何してる？ 戦士の奴は剣術こそ超一流だが魔法は使えない。夕方避難所へ戻ると朗々と絵本を読み聞かせる声。猛の周りに子供の輪ができていた。



## アホ

---

おまえはほんまにアホやなあと言うとあいつは怒り出す。「アホとは何よアホとは。ふつう自分の彼女に向かってアホとか言う？ 信じらんない」「いやいや、関西人の『アホ』っていうのは二種類あってな。さっきのアホは」「もういい！」ええい。面倒臭い。ぐいと抱き寄せて唇を塞ぐ。

## 小銭

---

「おい北村。小銭あるか？」「ああ」「両替してくれ」山本は千円札をぴらぴらとなびかせる。ポケットを見るとすでにパンパンに膨らんでいる。「小銭集めてどうするの？」「募金箱持って突っ立ってるアホ面学生を見ると苛々してしょうがねえから小銭ぶっこんでクソ重くしてやんだよ」

## 摩擦

---

膾でイケないとぼやく佐伯に俺が口で抜いてもらってるのならいいじゃないかと言うと彼女が傷ついた表情を見せるのがつらい。だと。要するに摩擦が少ないのが問題なんだろう？ お前が小さいのか彼女が大きいのかは知らんが。スペーサーを噛ませばいいんだよ。てな訳で今3Pしてる。

## 語り部

---

泣き声は止み、語り部の声だけが闇に響いている。すっかり話に飲まれる子供たち。いや大人も語り部の声にそっと耳を傾けている。不安な夜はひゅんひゅんと過ぎてゆく。やがて寝息を立てはじめる子に語り部はやさしく微笑む。それを見て月も心があたたまる。ではではこれにてお終い。

## ツラ

---

春がきたのでツラを脱いだ。カミングアウトだとかそういった格好の良いものではない。ただ「脱いだ」のだ。そう。その日は朝から暖かった。ところが入社しても誰も指摘してくれない。なぜだ。いつも通りきっちりと定時で上がり行きつけの飲み屋のママに愚痴る。「あら。そういえば」

## ひまわり

---

丘を越えると一面のひまわり畑。麦わら帽子をかぶった農夫が遙か彼方に見える。わたしはむすめの手をとりゆるやかな坂道を下ってゆく。むすめは道の左右から見下ろしてくるひまわりに、こんにちは、こんにちは、と挨拶をくり返す。ひまわりもまた風に揺れ「こんにちは」と会釈する。

## 匂い

---

髪を切る。とつぜん、そう思い立って外に出た。数カ月ぶりに吸う昼間の外気。光より人目よりなにより匂い。匂いに気が付いた。空気ってこんな匂いだっけ。すうっと深く吸う。夜の空気と全く違う。草木とお日様と昨夜の雨で濡れたアスファルトの匂いがまじりあった3月、春の息吹き。

## 水

---

クロが蛇口から落ちる水滴をじっと見つめている。もうそのお水は飲めないのよ。私がそう言うと不思議そうに首をかしげる。困ったわね。抱っこして床に降ろす。何？ 外に出せと言うの？ クロはとことこと歩き、隣家の門柱の前で立ち止まる。猫よけのペットボトルが並べられていた。



## 千羽鶴

---

帰れ帰れ。用なしだと言われた千羽鶴。しょげてしょげてほどけた糸がはらりと落ちると鶴はふわり。宙に浮かぶ。隊列を組み窓から飛び去ってゆく千羽。翼を傷めた一羽が床に。それを拾った少年は彼女の翼をそっと直した。浮かんだ鶴は、しばしためらい、宙に揺れ、ふたたび彼の掌に。

## ねこ

---

なんだいどうしたじっとみて。きになるのかい？ これは「ねこ」っていつてな。がれきをのせてはこぶんだ。なにこれっぽちちすぐかたづけてまたきれいなまちをつくってやるさ。おいおいどうした石ころくわえて。てつだってくれるのかい？ そうか。ここはおまえさんのまちだもんな。

## 類型

---

「血液型何型？」「B型だけど」「やっぱり！ なんだか話を聞いてても個性的な感じだしB型っぽいなーって思ってたんだ」「あのね。人の性格が4種類に分けられるはずないでしょ。科学的根拠も何もない血液型性格判断で人を類型に当て嵌めるのやめてくれる？ ほんと男ってバカね」

## 同窓会

---

同窓会の連絡、かんじ君にした？ いやゆうべえがするって。いやお前がするって言っただろ。なんだよお前だろ。もうやめなよ。来たよ。あいつは毎年ちゃんと来るさ。かんちゃん年とったなあ。髪も真っ白だ。「ごめんなみんな俺だけ」まだ言ってる。おれたちだってここにいるのにね。

## 好き

---

あたしのこと好き？ ダメ元で言ってみた。いつ訊いても嫌いだよとかば一かとかしか言わないあいつも今日だけは好きだよってしてくれるかと思ったのだ。悠二は読んでいた本から顔を上げる。「もう二度と言わないぞ」滅多に見せないまじめな顔に息を吞んでしまう。「大嫌いだよ」

## 飼い主

---

「いったいどうして」「飼えなくなったからといって放り出して勝手に生きろというわけにはいかんのです。路頭に迷うのは目に見えてます」「だからといって何も殺さなくても」「最後まで面倒を見るのが飼い主の務めなんです」社長は涙を流す。「ほんとうにかわいい従業員たちでした」

## うそつき

---

「なんもせえへんよ」うそつき。わたしはいっしょうけんめいにらみつける。「ほんまほんま。ほんまになんもせえへんから。行こ」ぐっと手を引かれる。わたしはもつれる足をなんとかほどき、うつむいたまま彼の半歩後をついて行く。ネオンが水たまりに揺れている。わたし、なにしてんだろ

## 寝ずの番

---

お前ら若いもんは寝ずの番や。ほなわしらは寝させてもらうで。なんやそれ。と突っ込む間も与えずに親父たちは二階へ消える。しゃあないな。俺と従兄弟の健はばあさんとの思い出話をアテに酒を飲む。こらお前ら何寝とるんや。親父の声。朝だ。俺たちの体にはいつのまにか布団が掛けられている。



目が覚めると窓の外を見慣れぬ駅舎が過ぎてゆく。また寝過ごしたか。そう思った。ところがおかしい。電車は一向に停まる気配を見せない。車両にはいつのまにか私一人だけが残されている。終着駅で降りようとする扉の外に昨年亡くした母の姿が。怒ったような顔で「戻りなさい」

## ふわふわ

---

「これちがーう。だってたまごがふわふわしてないもん。ママのオムライスはもっとふわふわしてるんだよ」「そう」おばあさんは淋しそうな顔をする。「でも、おいしい。バアバのオムライスもおいしいよ」「ありがとう」おばあさんは微笑む。「さあそろそろミケもごはんだわね」にやあ。

## 仕事

---

ほら、なにしてるの。ぼうっと突っ立ってないで、声をかけに行かなきゃ。迷ってるお客様の背中をそっと押してさしあげるのが私たちの仕事よ。先輩はよおく見てなさいと言い残し、客の元へ歩み寄る。お決まりになりましたか？ 先輩は返事も待たずに自殺志願者の背中を優しく押した。

## ペットショップ

---

「ママ見て、かわいい」「あらかわいいわねえ」つぶらな瞳。札には生後8ヶ月と書かれている。「僕この子ほしい」「ペットを飼うのは大変なのよ。ちゃんと世話できる?」「できるよ!」「人間がかわいいのは子供の頃だけよ」店の奥から中年男が睨みつけてくる。「あれはきっと売れ残りね」

「 」

---

もうちょっと右、うんそのあたり。「 」彼の指ファインダーにうまく私と景色が収まったようだ。カメラなんて持ってないくせに。そう言うと、記憶に焼き付けるからいいんだ。なんて。ひとつ時間がたてばびっくりするくらい忘れるんだよ。私は年下の彼氏の指をぎゅっと握りしめる。

## 写真

---

彼女が携帯で料理の写真を撮ろうとする。「やめとけ」「なんで？ ブログで紹介したらお店の宣伝にもなるじゃん」「周り見てみ」座敷には女将と談笑する家族連れ。カウンターには雪駄履きのオヤジ達。「分かるだろ。宣伝なんて必要ない店なんだよ」彼女は黙って携帯を折り畳む。「さ。頂こうぜ」

## ドライブスルー

---

「いらっしゃいませ。お持ち帰りよろしいですか」「ああ」「サイズはいかがでしたしょう？」「Sサイズでいいよ。もう歳だしね」「かしこまりました。焼き上げますのに少々お時間がかかりますが」「一時間後に取りに来るよ」「ねえあなた」「うん？」「ドライブスルー火葬場って本当便利ね」

## 迎え

---

雨だ。なのに。傘がない。駅には次々と迎えの車がやってくる。おれはひとり取り残される。来た。妻が。自転車で。おせえよ。なんでチャリンコなんだよ。車の鍵がね見つかなかったの。ばかか。久しぶりだね。二人乗り。思い出すね。何を。学生の頃。ふん。ちゃんとつかまってるよ。



## 身分証

---

身分証を。と言われ、彼がしぶしぶと財布から取り出したのは宇宙人登録証だった。ネットカフェの店員がバックヤードにコピーを取りにゆく。「水原くん、宇宙人だったの?」「うん」「でも、見た目は」「僕らはほらどこにでも溶け込める種族だから」彼の右手がすっと透き通ってゆく。

朝からジョアン・ジルベルトとかかけるのやめてよ。また寝ちゃうじゃない。分かったよ。つかの間音が止んだかと思うとこんどは激しいギターリフが津波のように静寂を押し流してゆく。メタルもやめて。あなたは極端なのよ。中間ってものがない——唇を塞がれる。目が覚めた。だろ？

## 雨の日

---

雨の日は土から顔を出す。あの子の顔を見るために。蛙のあの子は紫陽花の葉の上でうっとり  
と目を瞑り雨のシャワーを浴びている。僕は飽きもせずにあの子の横顔をずっと眺めている。水  
かさが増えてきた。息が苦しい。でもあの子から目が離せない。このまま溺れ死んでもいいやと  
思う。

## 冷たい感触

---

一緒にお風呂に入ろうと言っても頑なに拒む。電気は消してね。いつもそう言う。暗闇に肌を合わせる。ひやり。人肌とは思えない冷たい感触。僕は昇り詰める。彼女の息も荒くなる。だけど。彼女の肌は冷たいままだ。その理由を聞いてみたい。でも聞けない。全てが終わる気がするのだ。

## 雨煙

---

住み慣れた街を離れたのは2月。今は6月。傘を差し家を出ると雨煙に紫陽花の花だけがぼんやりと浮かんでいる。大きな葉の上でまどろむ痩せ過ぎの雨蛙。水溜りにはふやけて白くなったみみず。下ろし立てのレインブーツはかかところが擦れてすこし痛い。かばんに絆創膏、まだあったっけ？

## たこ焼き

---

たんっ。一太刀で指が落ちる。すとなんとん。輪切りに斬る斬る。煮えたぎる鍋の湯に放り込む。茹で上がった指は生地の上に落とされる。ソースの芳しい香り。熱々のたこ焼きができあがる。ほれ口開けえ。どや。うまいか？ 大阪で極道がヘタ打つところなるねんど。ようおぼえとけ。

姿見を見て今日も溜息をつく。何でこんななんだろう。鏡の中の顔がぐしゃりと歪んだ。そんなに嫌なら代わってあげる。耳元で声がして私はいつのまにか鏡の中から私を見ている。同じ格好。なのに違う。表情が明るい。じゃあね。私は私を置いて颯爽と部屋を出て行く。私の笑顔ってあんなだったんだ。

## オヤジ

---

雨降りて傘持ちゃあ駅のホームでゴルフの素振り。だせえ。ほんと日本のオヤジ連中はどうしようもねえな。そう思ってた。一人のオヤジがエアギターならぬ傘ギターを弾き始めた。数回のダウンストロークのあと、腕を風車のように回し出す。The Whoか。思わず笑みがこぼれた。



## バッテリー

---

なんてこった。レストランを調べようとした矢先にPhoneの電池が切れる。バッテリーカフェに寄っていい？ 彼女は黙って頷く。駅前のカフェで僕はPhoneにコードを繋ぐ。ごめんね。いいの。わたしも充電したかったの。シャツのボタンを外した彼女は鎖骨の下にプラグを差した。

## フィルム

---

「部屋でやればいいじゃない。なんでわざわざお風呂場で。しかも裸でやる必要があるのよ」「部屋で服を着たままやると埃が入るんだよ。せっかくの新品なんだからキレイに貼りたいだろ？」

「埃も気泡も入れたくないんだ」昨夜。そんなやりとりのあと保護フィルムを貼った。嫁の身体に。

## 蚊

---

蚊だ。こっちの世界にもいるんだ。叩き潰した。派手な音がしたせいか薫さんが目を覚ました。どうしたの？ なんでもないです。薫さんは顔に寄ってきた蚊を手で追い払う。蚊は殺してはダメよ。警報フェロモンを出して仲間を呼ぶから。薫さんは空を見る。変ね。黒い雲が近づいてくる。

## 合コン

---

町おこしのために企画された大規模合コンに参加してみることにした。その数なんと1200人。つまり男女それぞれ600人が一堂に会するのだ。いくら喪男の俺でもさすがに出会いがあるだろう。そう思った。乾杯の音頭からすでに3時間が経つ。まだ俺の自己紹介の番は回ってこない。

## 電話

---

着信音が鳴る。慌てて家を飛び出す。こんな時間からどこいくの！ 背中に母親の声。電話だよ電話。糞狭い家だから自分の部屋などない。親や妹の目の前で女と電話なんかできない。向こうもそれを知ってるから長めにコールを鳴らしてくれる。つか先にメールしろよ。まったく。もしもし？

## 洗い物

---

カチャカチャと食器が優しく当たる音。「ねえ、どうだったのママ？」「あなたの綺麗な手を肌荒れから守ります。それがプロポーズの言葉だったわ。ね？　あなた」「うん」広い背中越しに穏やかな声が返ってくる。「ふうん。それでパパがいつも洗い物をしてるんだ」

## ひとり

---

朝起きたら何かがちがかった。TVを点けても砂嵐。なぜかネットも繋がらない。仕方がない。シリアルを流し込んで家を出た。街にひとけはまるでない。車が一台も走ってない。とぼとぼ歩いて駅に着いた。電車が動いている気配もない。静かだ。世界に俺一人だけが取り残されたようだ。

## 救い

---

俺が寝ている間に何が起こったのかはわからない。ただ世界から人が消えた。いや人だけじゃない。犬も猫も鳥も鳩も。木々はある。花も咲いている。虫は、どうだ？ まだ見ていない。だが不思議と恐怖は感じなかった。むしろ救われた気分だった。もう会社に行かなくてもよいのだから。



## 連絡

---

たまには連絡しろ。実家に帰るたび親父は言う。連絡。何を？ お父さんはお兄ちゃんと飲みに行きたいんだよ。妹はそう言うが酒癖の悪い父親の姿を子供の頃から目にしてきた俺は乗り気になれない。また連絡しろ。帰ろうとする俺に今日も親父は言う。振り返ると小さな背。考えとくよ。

## 動物園

---

「どこ行きたい？」と訊かれて動物園と答えた。「雨なのに？」私は頷く。「いいよ。行こう」「いいの？」「だって行きたいでしょ？」「うん。私の好きな爬虫類両生類館は雨とか関係ないから」「なるほど」彼は笑いながら言う。「夜行性動物舎も面白いしね」この人分かってるなあ。

## 将来の夢

---

「皆の将来の夢は何かな？」子供達の手が一斉に挙がる。公務員公務員お嫁さん公務員お嫁さん。「いやに現実的だね。もっと大きな夢はないのかな。例えば、政治家とか」子供の一人が口を尖らせる。「だって政治家って呼び捨てにされたりバカ呼ばわりされたりでしょ。そんなの嫌だよ」

## 綺麗なもの

---

「素敵な絵。あっちゃんセンスあるね」「美的感覚は小さい頃からどれだけ綺麗なものを見てきたかで決まんだよ」「ふうん。でも美術とか興味ないでしょ」幼馴染の篤は私をじっと見つめる。「なによ」「綺麗なものはアートだけじゃねえよ」「は？」篤は再び読みかけの漫画に目を戻す。

## ヴヴヴ

---

床を擦る音で目が覚めた。ずるり。それはベッドの中に入ってくる。太腿に冷たい感触。やめてよ。ヴヴヴ。やめてったら。ヴヴヴヴ。たくあんは払いのけようとする私の手をかわし、股の間に濡れた身をこじ入れてくる。ねえ、せめてシャワーを浴びてきて。ヴヴ。お願い。痒くなるから。

## 戸締まり

---

「戸締まりは大丈夫かい？ こっちのニュースでもやっていたけど日本中が吸血沢庵だらけじゃないか」『大丈夫よ。心配性ね』「新聞受けは？」『あ』「バカ！ 奴らは少しでも隙間があれば入ってくるんだよ」『すぐガムテープで閉じてくるわ』「急げ」『ああっ』悲鳴。通話が切れる。

## 喫煙室

---

「あー煙草吸いたい」「せっかく博物館に来てるんだから少しぐらい我慢しなさいよ」「お。喫煙室あるみたいだぞ。一服してくるから先見てて」奴は煙のように消え去る。「もう」縄文人、弥生人と精巧な人形の展示が続く。そして現代人の隣のガラス部屋には煙草を吹かすうちのアホの姿が。【煙人】

## 海

---

八月。誰もいない海。僕は彼女とふたり、貸し切りの浜辺に座ってトマトを齧っている。なんでトマト？ 好きなの。これ冷えてないよ。元々そういうものよ。塩は？ バカだなあ。そのまま食べたほうがおいしいでしょ。彼女はかぶりとトマトにかぶりつき、赤いしずくをじゅるりと啜る。



## 穴

---

深い穴の中に幾千もの箱が転がっている。「TVの墓場だよ。よく見ててごらん」博士がランタンの火を消すとTVたちは青白く輝き始める。「彼らの記憶だ」早回しで映し出される人々の笑顔はやがて醜く歪み、最後には無表情に。ぷつり。そこで画面は消える。博士はランタンを灯した。

さいきんどうにも物忘れがひどい。言葉が出ない。漢字が書けない。人の名前が思い出せない。「母さん、この役者誰だっけ」「知らないわよ。検索したら？」つれない返事。まあいい。検索すればすぐに分かる。私は自室に向かいかけ、ふと足を止める。「母さん、検索ってなんだっけ？」

## 食事

---

「久しぶりだね。二人で食事」「ああ」「なに食べる？」「寿司」「焼肉だろうが寿司だろうが一人でも余裕。とか言ってたじゃない。一人でも食べてたんでしょ？ お寿司」「一人だと色々食えないんだよ」「一人前二カンだから？ 言えば一カンでも握ってくれるよ？」「うるさいなあ」

## 花火

---

「すごくきれいだったよ」少年は帰り支度中の老花火師に話しかける。「そうか。そりゃあよかった」「来年もやるよね」「ああ。お前さんが観に来てくれるかぎりはな」少年は去年の夏のやりとりを思い出す。老花火師は現れなかった。世界に一人取り残された少年は小さな手で線香花火を握り締める。

140字で小説なんて書けるわけないじゃん。私がそう言うと彼は黙ってポケットから携帯を取り出し文字を入力し始める。ピロンと私の鞆の中で音がする。目の前の彼から届いたメールの中身は見事に140字丁度の物語で、でも最後の#twnovelって何？ つい癖だね。彼は悪戯っぽく笑った。

## 夏祭り

---

せっかく浴衣着てきたのになんですぐそうやって脱がそうとするん。浴衣姿がかわいいからやん。かわいいと思うんやったらもっと見てくれたらええやんか。せやな、明るい部屋でじっくり見るわ。手を引かれる。うち着付けできひんよ。祭りの日は着付けの人もおるから。男はほんまあほや

## 母ちゃんの味

---

あんたは本当に親不孝者だよ。母さんを残して先にいくなんて。しょうがないよ。息子は笑う。最後に食べたい物はあるかい？ 母ちゃんの味がいいな。母さんの味？ 朝マック。いつも仕事明けに買ってきてくれたもんな。あんたは玄関で寝てたりしてねえ。ありがとう母ちゃん。ごめんな

## 家守

---

宿の人。家守が出ますので窓は必ずお閉めになってエアコンを使って下さいだって。こんな夜風の気持ちいい日にエアコンとかwww ないわ。自販機で酒を買い部屋に戻るとカーテンが風に揺れている。視線を感じる。俺は天井を見上げる。男と目が合う。どんよりとした目。爬虫類の目。



## ゴミ

---

「ママ、パパは？」「外よ」「また？」「酔っ払って帰ってきたから放り出したのよ」わたしはゴミ捨て場で寝てるパパを連れて帰る。「放っておけばいいのに」「ダメよママ」「沙弥香だけがパパの味方だな」「ママ、今日は何曜日？」「ええと、金曜日ね」「生ゴミの日は月曜日でしょ」

## クロエ

---

黒髪ショートの女の子が本館前の通りを歩いてくる。隣に座っていた陽子が呟く。クロエだ。クロエ？ ハーフなのかな。そう思った。おーいクロエー。陽子の声に気づいた彼女は手を上げる。こんにちは。ども。これ祐太くん。これってなんだよ。黒江美奈です。なんだ。苗字だったのか。

キャスターの眉間には皺。つけっぱなしのテレビから流れてくるのは不景気だの。失業だの。自殺だの。事件事故だの。暗くなるような話題ばかり。じっさい飲まなきゃやってられないよ。mgmg。「あらあらどうしたのかしら。きょうはみょうにたくさん飲んでくれるわねえ。おっぱい」

夏真っ盛りだというのに今年はずっと蚊に刺されない。その代わりにたらと蠅がうるさく付きまってくる。ブンブンブンブンブンブンブンと。いったいなんなんだ。これでは執筆も進みやしない。頭を掻きむしるとぽろぽろと蛆虫が落ちてくる。そうか。おれはもう死んでいたのか。

## 証明写真

---

駅前の証明写真機のカーテンの裾から女の脚が覗いている。かれこれ10分以上ずっとだ。なにやってんだろ。電話を切り、振り返ると女は消えている。足音も何もない。終電はとうに過ぎている。周りにひとけも一切ない。ぶいん。機械が唸る。ぽとり。取り出し口に真白な写真が落ちる。

## お仕事

---

言われたとおりタンクトップに着替えてスタジオに入った。中にはカメラが数台用意されている。「では、このソファに座って下さい。身体の前だけは隠さないように。あとは自由にして頂いてかまいません」それだけ？ 「あの、お仕事は」「震度を計ります。あなたのおっぱいの揺れで」

## パンツ

---

かわいいパンツをはいてきてもいつもすぐ脱がされるしあいつきつとパンツなんか見てないと思うし腹が立つからたまにはちゃんと見てよって今日は言ってやったらあいつ脱がさずにパンツの股のところだけ横にずらして挿れようとしてきてこれならいいだろって、違うし、ほらもっと、あ、

## 紙の彼女

---

紙の中に彼女なんていないのよ。いい加減に目を覚まして頂戴。懇願する母親を尻目にアニメ雑誌を抱えた僕は家を出る。別に紙の彼女がいたっていいじゃないか。僕は自転車の前かごに彼女を乗せて地元の町を流す。クルマなんて必要ない。ペーパードライバーの僕には自転車と紙の彼女で十分さ。



## 告白

---

私から腕を組むとキャッチの男は目を丸くする。「積極的だね」「そう？ 確かに学生の頃から惚れっぽかったし恋多き女って言われたこともあるけど自分から好きだって言ったことは一度もないのね。だって告白はするものじゃなくてさせるものだって思ってるから」「お姉さんお仕事は？」「刑事」

## 蜂蜜

---

カーテンも閉めずシャワーも浴びさせず抵抗する女をむりやりに開脚させたおれはその花卉から零れる蜂蜜をただ舐めている。舐められている時はいやいやと身悶えしているくせにいざ舐めるのを止めたら止めたで潤んだ瞳でいやいやとおねだりをするのだから女といういきものは不思議だ。

## 図書館デート

---

図書館デートがずっと夢だったんだよな。でもやっところさできた彼女(現嫁)は今も昔もまるで本なんて読みやしないし、誘ってはみたけど、図書館デート？ 何それ？ ぷぷぷ。みたいなリアクション取る奴だし、所詮叶わぬ夢だと諦めてたんだ。「ぱぱーえほんよんで！」そう。去年までは。

猫がじいと壁を見ている。目をやると、もにゅもにゅが張り付いている。換気のため窓を開けたのが悪かったか。とくに悪さをするわけではないのだが、彼奴が移動したあとにはべとべととした粘液がすじになって残るのだ。まったく掃除する者の身にもなってほしいものだ。なあ。ニャア。

## ドーナツ

---

ドーナツの穴が食べたい。わがままな彼女からメールが入ったので駅前のドーナツ屋で買って帰った。どうぞ。皿に載せてミルクと一緒に渡す。ちがうの。穴の部分だけがほしいの。途方にくれたぼくは、ドーナツをひとつ食べてみせて、からっぽになった手のひらを彼女の前に差し出した。

## しずく

---

子供の頃の僕には不思議な力が備わっていて近所の畑のすみに植えられていた里芋の葉にのるしずくに糸を通してはきらきらと光る首飾りを作っていた。それを母や姉にプレゼントするととても喜ばれた。なのに今ではしずくはほろほろと葉の上を逃げまわるばかり。すぐにするりと地に落ちてしまう。

## 16の君

---

そわそわしちゃって。かわいいなあ。でも君はね、忘れてしまうんだよ。その気持ちを。耳をつねってやる。「いてっ」ふふ。さあ、そろそろいかなきゃ。ありがとう、あなた。わたし、あなたと結婚してずっと幸せだったよ。16の私が教室に入ってくるまえに、わたしは窓から空に飛び出した。

## 汚部屋

---

「汚い部屋だ。うんこを扇風機にぶつけたような酷さだな」「でもね。売れるのよ。この部屋。このままの状態。大学の研究室が買ってくれるの」台所のシンクや風呂場からわらわらと謎の生き物が湧き出してくる。「繁殖してるの。新種の生物が」マユミの眼球から蟲が這い出してくる。



## 眠れぬアンドロイド

---

眠れぬアンドロイドは今夜も電気羊の数をかぞえていた。一匹、二匹、三匹、四匹、待て。よく考えたら、羊は一匹ではなくて一頭なのではないだろうか？ 考え出すと、ますます眠れなくなってきた。

## 大穴

---

家を出ると道路に巨大な穴が開いている。あやうく落ちそうになる。おそるおそる縁から中を覗き込んでみても闇の底はまるで見えない。あの事故から六年目の夏。変わったことの一つがこれだ。俺は天を仰ぐ。向かいの高層マンションには化け物サイズのセミの抜け殻が引っかかっている。

## クリームソーダ

---

六歳のおれは気の抜けたソーダに炭酸を補給するようにぶくぶくとストローを吹いている。父親に頭をはたかれる。ぶくぶくぶく。またはたかれる。こんどは緑の海に浮かぶ島を突き崩しにかかる。バニラ島はあっけなく沈む。両親はなにも喋ろうとしない。おれはクリームソーダは嫌いだ。

## 電気羊

---

眠れぬアンドロイドは今夜も電気羊の数をかぞえていた。一匹、二匹、三匹、四匹、違う、明らかに違うものが紛れ込んでいる。「おい君、僕の眠りの邪魔をするな。君は人なのか?」「いいえ」「ではアンドロイドか?」「いいえ」「じゃあ何者なんだ」「電気執事です」「下がっていい」

## 違和感

---

ただいま。なんだかいつもと空気が違う。シンクには飲みかけのグラス。近所に住む母からメールが入る。「冷蔵庫に西瓜入れておいたから食べなさい」一人暮らしの私を心配して時々母親が来てくれるのだ。トイレに行った私は上がっていた便座を下ろして座り込むと母親にお礼のメールを打ち始めた。

## お札

---

自殺や殺人などがあった部屋。いわゆる事故物件の天井裏や押入れには必ずお札が貼られていると聞き、急に我が家のことが心配になった。帰るなりおれは嫁の制止を振りほどいて押入れの仕切りの裏側を覗き込んだ。信じられない。そこには大量のお札が貼られていた。

## 未来未来

---

未来未来。もはや読まれることのなくなった文字たちは晴れて自由の身になった。書籍から看板からはたまたディスプレイから抜けだした文字たちは初めは恐る恐る、やがて悠々と歩みだす。海を目指すもの。山を目指すもの。空を目指すもの。そう。今度は自分たちの為の物語を創るのだ。

眠れぬアンドロイドは今夜も電気羊の数をかぞえていた。一匹、二匹、三匹、四匹、「ねえ」妻の手が肩にかかる。五匹、六匹、七匹、「まだ起きてるんでしょ」「なんだい?」「たまにはしようよ」「今日は疲れてるんだ」妻は無言で背を向ける。すまない。アンドロイドに性欲はないんだ。



## ライオン

---

まーた家出したと思ってたらひょっこり帰ってきて誰にやられたのかは知らないけれど怪我までしてるくせにてんで悪びれもせずご飯にありついてるんだから。もう。病院代も高くつくんだからね。我が家のライオンはわたしの愚痴にもしらんぷり。ふふ。エリザベスカラー。よく似合ってるよ。

## くらげ

---

くらげになりたいと呟いたら彼氏に海に連れてこられた。水着がないと言っているのに買ってやるよってそんなとこだけ男気いらない。浮き輪を被ってプカプカ浮かぶ。海なんて何年ぶりだろう？ はしゃぐ彼氏に水をかけられ髪が顔に張り付く。お前くらげっつーかワカメだなw あーうるさいうるさい。

## 乳房

---

「俺はガキのころ婆さんに育てられてな。腕の悪い婆さんは俺が悪さするたびに垂れた乳房でビンタしやがるんだ。高速で飛んでくる皺々乳房の怖さが分かるか？ そのせいで俺は巨乳がだめなんだ。勃たないんだよ」「巨乳だって垂れてなければいいでしょ」「みないつかは垂れるんだよ。いつかはね」

## 交渉人

---

「残っている人はあなただけなんです。あなたが首を縦に振って下さらないと我々の計画はままなりません。このままこの場に一人居残っていても仕方がないでしょう？ お願いします。どうか我々の仲間に」「一晩考えさせてくれ」「いいお返事を期待していますよ」ゾンビの代表は部屋をあとにした。

## 面倒臭い奴

---

世の中面倒臭い奴が増えてきたので片っ端から殺してやろう。そんな事を考えている時、広告が目に入った。「面倒臭い奴殺します@死神」渡りに舟だ。早速電話をかけた。殺すのは一人ずつになるが順番はどうする？ そうだな。一番面倒臭い奴から頼むよ。了解した。ノックの音をした。

## 帰省中

---

「帰省中なんだ」「分かってるよ。だからこうして電話してるんじゃないか」南米から日本に帰ってきた本村に電話をするとどうも様子がおかしい。「帰省中なんだ」うわごとのように奴は同じ言葉を繰り返す。そこで電話は切れてしまった。数日後。自宅で腹を喰い破られた本村の遺体が見つかった。

## 人を呪わば穴二つ

---

憎くてしょうがない上司がいた。死ねばいいのに。気がつくとも呪詛の言葉が自然と口からこぼれていた。良くないというのは分かっていた。それでも止めることは出来なかった。おれは同じ言葉を何度も何度も布団の中で繰り返した。あくる日目覚めたらおれの身体は女になっていた。

## Mr.TV

---

「一年ぶりにやっと会えると思ってたのに」「そう悲しむなよ」PCは落胆する扇風機を慰める。  
「元気でやってるのかしら。彼」「もうブラウン管TVのことは忘れたほうがいい。それよりあいつはどうだい？」PCは液晶TVのほうにちらりと目をやる。「いやよ。あんな薄っぺらい男」



## やればできる子

---

行く先々でやればできる子という称号を欲しいままにしてきた俺が満を持して書き上げたのがこの小説だ。芥川賞直木賞など楽勝でW受賞、ノーベル賞も夢ではなかろう。俺は意気揚々と出版社の戸を叩く。「ボツ」「なにい！」「もう少し頑張ろうね。やればできる子なんだから」「うん」

## 腐れ縁

---

お互い独り身になっちゃったし飲みにも行くかってことで腐れ縁のユキと居酒屋へ。さんざん相手の相手をdisり合っちゃ、だよな！　だよね！　なんて肩組んで店出てきてさ。帰り道へたり込むユキを公園で座らせてるといつのまにか二人の顔の距離が縮まって、おれたちキスしてた。

## 流星群

---

娘が突然流星群が見たいと言い出した。だがペルセウス座流星群のピークは今日深夜。普段なら寝ている時間だ。そう言って諭すと、絶対見ると言い張って聞かない。一度寝かして頃合を見て起こしてやる事にした。眠い目を擦りながらとぼとぼと歩く娘。「ほら」私の声に娘が顔を上げる。星が降ってきた。

滯は夜空を見上げながらぼかりと口を開けている。それを見て笑っていると気付かれた。「パパもちゃんと見て！」はいはい。「もっと近くで見たいな」私は老体に鞭打ち肩車をしてやる。「わあー」次々と降り注ぐ流れ星。たまにはこんな夜も悪くない。それに。20代の太腿の感触はなかなかいいもんだ。

## 鍵

---

今日はいつもより1時間も早く家を出た。駅前で不安になる。鍵は締めただろうか？ 踵を返し家へと戻る。施錠を確認するとちゃんと締めてある。よかった。待て。クーラーは消したか？ 部屋に入り確かめる。よし。再び駅に着く頃にはもう汗だくだった。はて？ 鍵は締めただろうか？

## 願い事

---

願い事を叶えてやると尊に言われて流れ星を見に来た。「ここは特等席なんだ。しし座流星群の時もすごかったんだぜ」草むらに毛布を敷き二人で座る。だけど空には雲がかかっている月も星もなにも見えない。「ちえ。おかしいなあ」わたしは尊の手をにぎる。いいんだよ、流れ星なんて。

## 願い

---

鉄柵の向こう側ではゾンビたちが、ただ立ち尽くし、夜空を見上げている。いつもはあれほど凶暴な連中がだ。流れ星がひゅんと空を駆けるたび、ゾンビたちは、ああだのううだのと、言葉にならない唸り声を漏らしている。彼らはいったい何を願っているのだろう。

## 打者

---

「金属バットは品切れです」スポーツ用品店のガラス戸に張り紙。いまさらだな。今宵、この町に流星群が落ちてくる。球場へ着くとすでに男たちは素振りを行っている。早速、先駆けの流れ星がおれの頭上に降ってきた。おれはそいつを通天閣打法で打ち返す。流星よ。再び宇宙(そら)へと帰るのだ。



## 耳かき

---

耳かきをしていると、ずっと引っかかっていた言葉がぽろりと落ちてきた。散り散りとなった文字たちを、ティッシュの上で並べ直す。やはり分からない。なぜこんなことを言うのだろう。文字列が急にふわりと浮き上がり、彼の乾いた口調がよみがえる。心臓がきゅうっと締めつけられる。

## 自動販売機

---

ふしぎな自動販売機の前にはいつも人が並んでいる。やっと僕の順番が回ってきた。100円玉を投入する。落ちてきた缶をみただけではまだ中身は判らない。すうっと深呼吸をして一気に開ける。ちっ。まただ。中身は右手首だった。もう手首は両方揃っているのに。あとは左乳首だけなのに。

## 甲子園の土

---

「敗れた選手たちが涙を流しながら甲子園の土をかき集めています。おや？ スコップやショベルを持っている選手もいますねえ。おやおや、ユンボとダンプカーまで入ってきましたよ。これは一体どうしたことでしょう」「おそらく汚れた自校のグラウンドの土と入れ替えるんじゃない」

## バス

---

信号で原付を止めた僕の隣にバスが並ぶ。やたらと光が乱反射して眩しい。見上げるとそこには大水槽があった。バスの車体そのものが水槽なのだ。ガラスの向こうでは魚やサメが気持よさそうに泳いでいる。クラクションが鳴らされる。バスはすうっと加速して、呆気にとられる僕の目の前から走り去った。

## お料理

---

まず服を脱ぎます。返り血を浴びますからね。素材をお風呂場に持ち込んで解体したら、それを寸胴鍋に放り込みましょう。臭みを取るためには、お酒、あとネギやしょうがを入れると良いですよ。形が崩れるまで煮込んだあとは食べずに捨てます。これがもっとも安全な死体処理方法です。